

# 婦人と子ども

第十二卷第九號

## 幼兒に對する暗示的教育

東京女子高等師範學校教授 槇山榮次

幼兒に對する暗示的教育、是はチト奇を好んだ名前のやうに聞えるかも知れないが、何もさう變つたことでは無い。暗示に依れる教育と云ふことである。暗示と云ふ詞は英語の「サツジエツション」を譯したので、此原語は昔から使用されてをつた。併しながら心理學又は精神病學の熟語として用ひらるゝやうに成つたのは比較的最近のことである。即ち千八百四十年頃英國の醫師ゼームス、ブレードが催眠狀態を科學的に研究するやうに成て、始めて現今の如き意味で使用するやうに

成つたと云ふことである。暗示と云ふことを簡單に解釋して見れば言語、身振、目示(めくばせ)などに依て他人の心に影響を及ぼす作用であると云ふことに成る。然るに是だけでは其解釋が廣きに失して居ると云はねばならぬ。暗示と云ふには其影響が常の状態と異なつて稍々不自然なる状態にまで高まらなければならぬ。福來博士の心理學講義に「暗示と云ふ者は人の精神や身體に變動を生ぜしめる程強く與へられた觀念である。其實力を現はすことの出来る様に強く與へられた觀念であ

る。他人の精神を引きつけて三昧の状態に入らしむる様に與へられた觀念である」と書いてある。如何にも分り易く説明してあるが、併しながら是は催眠術の原理を説明する爲めに説き及んだのであつて主として催眠的暗示に就て述べてあるやうに思ふ。暗示には催眠的のものばかりでなく非催眠的のものもある。非催眠的暗示と云ふのは暗示を受くるものをして催眠状態即ち三昧に陥らしむることなく、唯其思想、感情、意志を特に興奮せしめて尋常の場合と稍々異なつた程度に達せしむるのである。例へば修身の話を爲す場合に教師自ら感情を起して熱心誠實に教授をするときには其感情其熱心が兒童の心に反響して彼等も亦同様の感情に打たれるのであるが是は一種の非催眠的暗示である。又教育者の人格が立派であつて兒童の敬慕を受くること甚強く、其一舉一動が悉く兒童に影響するとすれば是も一種の非催眠的暗示

である。此非催眠的暗示に依て感化を與へるのは即ち暗示的教育であるが、此事は幼兒の教育に於て殊に大切であると思ふ。

上杉鷹山公は其孫女増姫君を手元にて養育せらるゝとき、御附の女中へ「千代の春草」と題する教訓の文章を認めて與へられた。其中に次の如き文字がある。

易といへる書に蒙以養正とあり。蒙とは物をかぶりたるを云ふ物をかぶりては目も見えず耳も聞えぬなり。夫よりして童の何の辨別もなきを譬へて蒙とは云なり。その何の辨別なき内より邪ならぬ正しき道に導けば骨折ずして成長の後も正しき人となるといふことになん。其辨別もなきを諭し導くは詞もて教ふべきにあらす其取扱をもて感通することなり。それ物の感通ほど妙なるものはなきなり。猫はすく人の側へは知らぬ人とても自然に寄添ひ嫌ふ人の側へは寄つ

かぬものにて、捕ふる心なき人の傍には鳥驚かず、取る心ある人には間遠く隔れどたちまち飛去るなり。是人と鳥獸の上だに感通の理は免れず、況んや人と人とのうへをや、耳目の及ばざる所に感通の理はあるぞかし。今度お増殿手元にて養育のことなれば今日のうちへよりの取扱こそ大事なれ。いまだ一切の幼稚なるに何の事敷無用の辯に似たれども、教育と云ふは生れ出るよりはじめて一日もかけて叶はぬ事にて、段々と成長に随ひて其時々教へかた育てかたもあるとぞかし。先々今日の上は朝夕の取扱をいかにもやかましくなく事静に物和かにして、其附添ひ扱ふ人々互に能く和合し馴合ひ、お増殿の側へ寄るときは先づ我心を和かにして自己のうへを慎むこそ、始にいへるそよ吹く東風しとふる春雨なれ。知らず識らずの内にいつしか感通の理ありて先へは入るぞかし。まして乳

など参らする折には必ず心中を平かにして潔き心もて参らすべき事なり。たゞ何事も春の日のうららかなるに悠々たる心持こそあらまほしけれ。

さすがは明君だけあつて教育の事にも細かに注意せられ、今の教育書が示すよりも遙に適切なる教育の法則を示してをる。鷹山公の孫女に對する教育法は一種の暗示的教育であると思ふ。其所謂感通の理は感情の反響、即ち感情の暗示であつて幼児の教育には殊に大切であると云はねばならぬ。感情の暗示に就ては從來餘り注意されなかつたので、暗示と云へば信仰、意見、慾望及決心等の上でのみ影響するもの、やうに考へられて居つたのである。併しながら甲の人の感情が乙の人の感情に反響すると云ふことは多く見る所の現象であつて一種の暗示である。赤兒は滿一年に成るの前既に鏡に映つた己の影を見て悦ぶ。是は何の爲

であらうか。埃士利オーストリヤの學者グイタゼクの説明する所に依つて見ると、是は赤兒あかごが己の影であると云ふことを認めて悦ぶのではない。一年未滿ねんみまんの赤兒あかごの心は己の影であると云ふことを識別して自惚心うねほしんから悦ぶと云ふほど發達してをらない。赤兒あかごの鏡を見て悦ぶのは母が赤兒を擁して鏡に近づくときに必ず悦ばしい様子をするから、それが赤兒あかごの心に反響して其悦びと成り、其悦びの顔が更に鏡に映つて再反響するから、益々悦ばしい顔をすると云ふとである。又赤兒が己と同年位の他の愛らしき赤兒を見てニコニコするのも、大人が愛らしき子供を見て悦ぶのとは其性質を異にしてをる。詰り單純なる感情の反響であつて一種の暗示と云は

## 教育と動物心理

「動物心理學に對する教育者の興味及び其利用」

ねばならぬ。幼兒に接するもの、有つてをる感情が知らず識らず幼き心に反響して其心情の發達に少からざる關係を有するものであるから、鷹山公の教訓にもある通、幼兒教育の任に當るものは先づ我心を和かにして自己の上を慎むことが肝心である。幼年であればあるほど詞に依つて理論的に指導することが困難であるから、鷹山公の所謂取扱を以て感通すること即暗示的教育が殊に必要である。家庭の父母又は幼稚園の教育者は此點に向て大に注意しなければならぬ。暗示的教育に注意せずして徒らに外形的教育法にのみ訴るが如きは幼兒教育の甚しき誤であると思ふ。

## 菅原 造

と云ふ問題を、今「教育と動物心理」と題して、